平成 26 年 11 月 1 日　　53(26－2)

建設防災ボランティアニュース 第 53 号

目次

- 平成 26 年度総合防災訓練
- 伊豆大島の今
- 南相馬市からの報告
- 前期道路施設点検
- 橋歴板の寄贈

平成 26 年度
東京都・杉並区合同総合防災訓練

「自助」・「共助」と「連携」～本部班

雨上がりの８月３０日（土）午前９時より、総合防災訓練が杉並区の都立和田堀公園を中心に行われました。当協会は建設局からの協力依頼を受け、第三建設事務所班７名、東部公園緑地事務所班３名、本部３名（久保田元久、林幹生、野村隆）の１３名の会員が参加しました。

今年度の訓練は、大規模な地震の発生に備え、住民のみなさんの自主防災の能力を充実させ、地域が一体となった防災力を向上させるとともに、これを支援する東京都及び各防災関係機関の連携強化による災害対応力の向上を目的として、東京都と杉並区が合同で実施しました。

訓練の特徴は、家屋の倒壊・延焼による火災危険度が高い木造住宅密集地域における共助・公助の活動を想定した訓練です。

前夜の雨は早朝にやんだものの、あちこちに水溜りが残るなか、実戦さながらの訓練が繰り広げられました。協会の参加会員は、様々な訓練のうち、建設局が行う和田堀公園における道路啓開訓練や水防及び防災公園関連の展示・体験訓練について、参加・協力しました。

訓練終了にあたり、舛添知事等からの講評と、建設局関係の参加者に対しては、横溝都技監からの慰労を含めた講評があり、訓練は無事１２時過ぎに終了しました。

担当理事　野村　隆

土嚢はずっしり重い～三建班

今年度の合同総合防災訓練は、三建管内、和田堀公園で実施され、三建班からは井手和夫、瀧澤勝、加藤基雄、小川恭治、中田勝司、茂木健治、中川良雄の７名が参加しました。

三建班と本部員

和田堀公園は、善福寺川に沿った計画地を長年にわたり少しずつ整備してきた細長い公園です。そのため大きな空地がなく、いくつかの会場に分かれての訓練になりました。また、この辺りは、住宅密集地で道路も狭く曲がりくねり、まさに都市防災の難しい地域の一つになっていると思われます。

当日会場に到着すると、防災服や水防服の都職員をはじめ、濃紺の制服の消防庁職員、迷彩服の自衛隊員など様々なユニホームが行きかい、また狭い道路は消防車、自衛隊車両をはじめとする種々の作業車、一般通行車、路線バス、自転車などで大変な混雑でした。それを交通整理する警備員や各組織の職員は真剣そのもの、大声を張り上げ本番さながらの対応に追われ

ていました。

我々が参加した訓練は、展示・体験訓練という会場で、土嚢積体験や水圧扉体験などを三建の若手職員と一緒になって、住民のみなさんに指導するものでした。私が配置された土嚢積み体験は、用意された砂をスコップで４杯ほど土嚢袋に詰めて土嚢を作り、千鳥積みの土嚢堤をこしらえる実践的な体験です。住民の方が見える前に私も土嚢つくりを体験しましたが、恐らく１４、５キロはあると思われる土嚢はずっしりと重く、大変さを実感しました。

土嚢積み体験

興味を持ってこられる住民の方は、親子連れ、年配のご夫婦、友達グループと様々で、一様に土嚢の重さに驚き、貴重な体験をしたと喜ばれておられました。小さなお子さんも多数参加され、必死になって土嚢袋を運ばれておられました。水防の大変さを身を以て感じられたことでしょう。

また外国の方々の団体見学もあり、みなさん、身体を使っての土嚢つくり体験を楽しく学ばれておられました。

こうして、予定の１２時まで、あっという間に過ぎました。その後、舛添知事や横溝都技監の講評の頃には、曇天が青空に変わり防災訓練は無事終了しました。訓練に参加された皆様、お疲れ様でした。

三建班　　中川良雄

防災公園の役割は？～東部公園班

建設防災ボランティア東部公園班は、鈴木進、佐藤清美、小林和雄の３名が参加しました。８時４５分に細岡東部公園緑地事務所長の挨拶があり訓練に入りました。

東部公園班

ボランティア班の訓練内容は、東部公園展示ブースで、見学者に「大規模救出救助活動拠点」に指定された都立防災公園の災害時における避難場所、被災者等のベースキャンプとしての役割等について、パネルで説明を行いました。また訓練会場の「都立和田堀公園」について、震災が起きた場合公園に対してどのようなことを期待されるかなどの防災アンケートや、避難収容人数、震災時の利用計画などを問う防災クイズを見学者に積極的に配布、説明しアンケート等の回収を行いました。

展示ブースには、火に強い樹木（さざんか、くろがねもち、ネズミモチ、イヌつげ、柊、くちなしなど）の見本がおかれ、これらの説明も行ったところです。

展示ブースで説明

町会、家族連れ、学生、年配者など多くの見学者が訪れ、防災公園の避難収容人数や公園の役割など熱心に見ていました。

終わりに当たって、本部テント前に集合し東京都知事、杉並区長等の挨拶・講評があり、その後、横溝東京都技監からの挨拶、最後に細岡東部公園緑地事務所長より挨拶があり無事終了となりました。

東部公園班　　小林和雄

訓練風景ピックアップ

道路整備保全公社の所有機械による道路啓開訓練

臨場感一杯の消火訓練

建設局幹部とハイ！チーズ！！

大島町土石流被災地の復旧が終わった現場を見て

１　はじめに

2013 年 10 月 16 日に発生した大島町土石流災害から８カ月を経た本年６月に、応急復旧が終えた現場を視察してきましたので、その概略を報告いたします。

大島町の土石流災害は、台風 26 号の影響で前線が大島元町周辺に停滞したことから、24 時間降雨量 824㎜(1 時間降雨強度 122.5㎜)という 1 年の平均降雨の約 30%に相当する量が一時期に集中して降り、以前から降っていた雨で大島の土壌の含水比が飽和状態にあるなかで、その猛烈な雨によって表土が重くなって土砂が崩落し、多くの被害が発生したものでした。テレビなどの報道で見る様子と現地では、相当の違いのある大規模な災害となっていたものでした。

大島などの伊豆諸島の火山島は、溶岩石の上に表土として火山灰などが積もっている地勢で表土が薄く、薄層なだれのように表面の土砂が滑落するメカニズムが強い地質となっている。このため、今回の豪雨では大きな被害となったと推測している。

２　大切な土砂災害防止施設

三原山の山肌に何条もの崩落が発生した荒れた山肌となっていた現場を見て、当時の自然災害がすさまじいものであったと思う。

当該被災地は、砂防河川が整備されており、砂防ダムに設置された鋼製スリットが減災の大きな要因になったことが、良く判る現場となっていた。

被災前には、砂防河川でも鋼製スリットは、過大設計ではないかと感じていたが、今回、元町の集落地区の被害が少なかったのは、この鋼製スリットや砂防堰堤などによって、巨大な崩落を抑えたことによるものであると思う。被災

現場を見れば見るほどどうしてどうして、これでも足りないというほどの災害であった。

大金沢の鋼製スリット

約 40 名近くの尊い人命が失われたものの、こうした砂防施設があることにより、被害の拡大を抑え、減災となったことは確かなことであろう。これまでの東京都建設局河川部の決断を評価したいと思う。

都道脇の砂防河川
左の人家の崩壊箇所まで土石流が来た

伊豆大島などの伊豆箱根・小笠原国立公園内の町村では、被災地の流木などの処分について野焼きなどの行為ができないため、チップにして内地に送り、大型の焼却炉で燃やすことが義務づけられているため、その費用も膨大なものとなっている。また、今回の流土砂については、木の根などが混ざっているため、これらの除去などに時間を要している。

自然公園区域にある町村の特殊性として復興には、時間と費用がかかるとともに、環境省などの調整が必要となっている。

大金沢の復旧後”前方の砂防ダムは今回かさ上げ

３　復興に向けた大島支庁土木課の皆さんへ

被災から 8 ヶ月経って大方の復旧は完了している。この間、崩落地盤の安定が未だできていない状況下で、再崩落の危険性もあるなかで大島支庁土木課職員の皆さんが、毎日奮闘していることが良く判りました。

これから支庁土木課は、復興に向けて砂防・河川の強化・改修に長い年月が必要と思いますが、復興に向けた課題としては、大島町がリーダーシップを発揮して住民との協調による復興に向けた取り組みが行われることを期待しています。

今回、復旧がほぼ完了した現場調査にご案内をいただいた大島支庁土木課の石津係長さんには忙しいなか、現地での説明をいただき感謝しています。

また、大島支庁安孫子土木課長さん、金澤土砂災害対策担当課長さんのご理解をいただき、現場を見させていただいたことに感謝しています。紙上を借りてお礼申し上げます。

私たち東京都建設防災ボランティア会員として何か応援できることがあれば良いがと思いながら、同行してくれた中込さんと帰途につきました。

南西建班　中込孝仁
北南建班　新川　彰

南相馬市からの報告

北北建班（南相馬市在住）　松倉迪郎

ご無沙汰いたしております。

今回ボランティア協会から､南相馬市に赴任してからのその後のことについて報告するようにとの依頼があり、このような重要な紙面のスペースを頂きありがとうございます。

さて、東日本大震災発生からもう３年半以上が過ぎました。今でも、その時の大混乱した状況を思い出されます。

ＮＨＫ報道より

皆様もテレビ報道等でご存じのように復興はなかなか思うようには進んでいないと思います。東京都の任期付き職員募集の説明会の際に、ある自治体の方から「忘れられるのが怖い」という話がありました。たしかに、年に数回東京へ帰る時には、東京都建設防災ボランティアの作業服を着てＰＲに努め､リュックには｢がんばろう　福島｣の缶バッチをつけて中央線に乗りますが、都民の大震災への関心が薄らいでいることを実感します。

その一方で､防災ボランティアの多くの方が今も関心をもっていること､防災ボランティア協会は忘れていませんよと伝えることができることは幸いです。

１．任期付き職員へ応募した理由

さて、私は福島県の任期付き職員に応募する際に県事務所配属でなく、敢えて市町村のコースを選びました。被災現場にもっとも近く、被災した方々の将来への展望など、生の声を聴くことができる、復興を身近に見ることができると考えたからです。

しかし､南相馬市では市民の３割が避難し無人の町が今も残っています。市職員の方にも家族と離れて暮らしている方もいると聞いています。東北人は口が重いといいますが､職場に笑顔が少なく感じることがあります｡誰でもいやな思い出や悲しいことは口に出したくないのが当たり前であり、自分の考えの甘さを実感しています。

２．南相馬市とは

南相馬市は平成１８年に鹿島町、原町市、小高町が大合併してできた歴史が８年余の若い自治体です。

しかし、地域の歴史は古く相馬野馬追は供を連れた４００騎の鎧甲冑の騎乗武者が市内を巡り祭場に集合、ほら貝が鳴る中騎馬戦を戦う勇壮な行事です。千年の歴史がある国指定重要無形文化財であり、歴史を尊ぶ地域性を実感させられます。

また、二宮尊徳の銅像が市役所玄関脇にありますが、報徳思想を重んじ勤勉かつ優秀な職員で業務が進められております。

面積は東京都の５分の１近くと非常に広く、海岸部から山地まで様々な地域があります。今年は数十年ぶりの降雪があり非常に厳しい冬でしたが、降雪量も少なく東北とはいえ１年を通じて気候に恵まれた地域だと思います。主な産業は農業です。定年退職され田舎暮らしを考えている方には最適の地域ではないかと思います。

勇壮な相馬野馬追行列

３．担当業務について

次に、皆さんの関心「どんな仕事をしているのか」についてです。私は、昨年４月から水道課で避難解除準備区域となっている小高区内の給水開始を準備する業務を半年間担いました。住民はたまに帰宅する際にはポリタンクが必要でしたが給水開始によりその必要性は解消されました。当初はあまりにも環境の悪い中での作業に疲労困憊しましたが、この仕事を通じて町の状況を細かく見ることができました。

雑草が生い茂り土砂で埋まったメーターを探し水道の給水開始へ

現在は、土木課で市道の道路災害復旧事業の工事監督を担当しています。市道の多くは簡易舗装で路盤の上に厚さ４～５㎝の表層で構成されています。地震による路面沈下、ひび割れの他に津波で表層が流出しています。Ａｓ舗装がめくれ流されるとは驚きです。

業務のすべてがパソコンにより進められます。また、工事の発注から完了後の支払いにかかる事務も土木課の担当職員が行っております。皆さんは「歳出管理、予算執行伺、予算執行変更伺、支出負担行為、支出負担行為更生、支出命令・・・」といった言葉を知っていますか。ＣＡＤ、積算、電子決済と目が痛くなり悪戦苦闘の毎日です。私のような古い人間にはこの３つは非常に大変です。しかし、杉並区や新潟県から派遣されている若い職員の方々はすぐ慣れて難なく業務をこなし、たびたび混乱する私を助けてくれるありがたい存在です。

私のように、東京都の本庁勤務の長い者より、事務所の工事係で設計や設計変更などの実務をされていた方々のほうが即戦力ではないかと思います。他の自治体から定年後の再任用で派遣されている方がいますが、東京都でもどうでしょうか。

４．震災と津波被害について

（１）震災被害

新潟中越地震では仮設住宅地に「かえろう　山古志へ」と書いた黄色ののぼり旗がひるがえり住民の方々に希望を感じさせました。新潟中越地震では復興状況のパンフレットが届いていましたが、震災から３年も経てば被害を受けた家屋は解体され再建の槌音が響き、多くの住民が帰還して希望ある生活を迎えている時期ではないかと思います。しかし、南相馬市では地震でつぶれた古い家屋がいまだに残っています。

若い人を見かけない仮設住宅地

つぶれたままの家屋

（２）津波被害

昨年春に福島県へ来た当時は津波によるがれきは大半が片づけられておりましたが、今でも大破した車やトラクターそして、１階部分を津波で流された家屋を多く見ることができます。下の写真の松の木の皮がはがれていますが、たぶん漂流物が衝突して皮が落下したものです。雑草の中に松の皮が残っています。また、丘の上の水道給水施設もあらかた破壊されました。この高さまで、海面から１０m近くあるのではないかと思われますがまさに水の巨大な水の塊が押し寄せたことを示しています。津波の威力のすさまじさを実感し恐怖を感じ早々に降りてきました。

赤い線は津波の高さ
海面ははるか下

１階部分が流出した家屋

２階まで津波が到達

吹き飛んだ防潮堤

漂流物でなぎ倒された高欄

広大な農地と基礎だけが残る農家

広大な農地が津波により、また原発事故の放射能汚染により耕作が放棄され荒れる一方です。最近稲作の試験栽培が開始されたとの明るいニュースがありましたが、それでも農地の２％です。

（３）大津波への警告

こちらにきてあらためて大津波のことを調べてみました。そして最近の広島での土砂災害、御嶽山噴火もありますが、日本列島は間違いなく災害列島であることを実感しました。そこで東北人は度重なる大津波の被害から学びそれを子孫に伝えようとしてきました。いくつかの伝承を紹介します。インターネットで大津波伝承ハザードマップに細かく出ていますので興味のある方は見てください。

① 岩手県宮古市姉由地区の石碑の碑文

高き住居は児孫の和楽、想え惨禍の大津浪此処より下に家を建てるな

姉由地区では今回のような大震災でも言い伝えにより避難し村は守られたとのことです。

② 津波防災の町を宣言し意識の高かった田老町の碑文

巨大堤防で有名な田老地区にある昭和三陸津波訓令碑の『大海嘯記念』訓令碑碑文です。

1　大地震の後には津浪が来る

1　地震があったら此処へ来て一時間我慢せ

1　津浪に襲れたら何処でも此の位い高所へ逃げろ

1　遠くへ逃げては津浪に追付かる

1　常に近くの高い所を用意して置け

田老町は今回の津波で甚大な被害が発生しました。頑丈な堤防の一部が粉砕されています。頑丈と思われた防波堤が却って早期の避難を遅らせたのではという指摘もされています。また、港

湾空港研究所がインターネットで公開している資料を見ると、巨大堤防を破壊させた要因は、堤防の中に海水が浸入し、覆工コンクリートを吹き飛ばし、中の土砂が流出して巨大堤防の破壊につながり被害を拡大させたことがうかがわれます。そして、その時堤防はすべて健全であったのであろうか、覆工コンクリートに劣化や隙間がなかったのかと疑問をもちます。皆さんも是非この資料をご覧ください。

（４）東京は大丈夫か

東京では、津波の高さは数メートルと予測されているようですが０メートル地帯では被害は起きないのでしょうか。津波は遡上します。内水被害への対策は進んでいるのでしょうか。例えば、いざという時に河川にある雨水吐きゲートは隙間なく閉じるのでしょうか。漂流物で破壊されたり、がれきなどがはさまれれば機能を失うでしょう。

また、水門や防潮堤の耐震化やかさ上げが進められていると思いますが、津波の高さが数メートルでも脆弱部を起点に施設が破壊されれば、０メートル地帯の家屋は壊滅的被害を受け、地下鉄や地下街は水没する可能性があります。

特に、石油コンビナートや巨大工場地帯の岸壁が被害を受けた場合や東京湾内の大小多くの船舶が衝突により火災が生じた場合には、津波の遡上とともに住宅地内で火災が発生する可能性が高いと思います。

（５）新たな取り組み

今、震災復興へ巨大な防潮堤が建設されようとしています。確かに、強靭化のためには巨大防潮堤はやむを得ない地域もあると思います。しかし、数百年に一度の大津波に対して強靭な施設だけで市民を守れるのでしょうか。強靭化の前提は数百年先の施設が健全であることであり維持管理が不可欠です。そして、施設が市民にとって身近な存在であることが条件であると思います。

たとえば、未来のいのちを守る森の防潮堤と鎮魂と復興・再生の思いを込めて、「鎮魂の森」をテーマに２０１３・１０・０６復興市民植樹祭（主催：南相馬市）が開催され、多くの市民が参加しました。「瓦礫を活かす森の長城プロジェクト」の取組です。今後もこの森は市民の憩いの場所となり、市民により管理され津波から命を守ることになるのではないでしょうか。

植えられた樹木

筆者も参加

５.原発事故について

（１）深刻な被害

福島第一原発事故は国際原子力事象評価尺度レベル７でこれはチェルノブイリ原発事故と同じ水準ですが、福島第一原発は規模においてはるかに深刻です。

福島県は岩手､宮城県と比べ大震災と大津波の被害の外に原発事故による被害があまりにも大きく影響しています。３年半を過ぎたとはとても思えない状況にあります。他県の津波被害を受けた市町村で人口の流出が続いているとのことですが､南相馬市でも７万数千人の市民のうち現在では４万７千人しか市内に居住していません。

原発事故や津波により居住が制限されていることが影響しており、まさに市の存亡にかかる問題だと思います。さらに、町が復興するためには今後も相当の長い時間がかかると想定されますが、その気力と体力を全国で支える必要性があるのではないでしょうか。無人と化している街並み、毎日報道される放射線量の数値、街角に立つモニタリングポスト、考えてみればまことに不思議なものです。

そして、震災、津波、高潮の他に巨大台風が来襲し原発事故が起きていたら事態はもっと厳しくなっていたのではないか、もし東京方面に放射能雲が流れていたら、たぶん東京は大混乱になっていたのではないかといろいろ考えさせられます。

協会の皆さんは、数年間も音のない無人の東京都内は想像できますか。

避難している人口
帰還困難区域内　　約25000人
居住制限区域　　約23000人
避難解除準備区域_約32000人
合計8万人もの避難者が現在もいる
比較　国立市　　75000人
　　あきるの市　81000人

なぜか、風下に避難させられた。（情報提供の遅れ）

無人の小高区内のメイン通り

民家の近くにサルが

現在、帰還困難区域となっている富岡町、浪江町（ＮＨＫ－ＴＶ報道から）

イノブタの増加　　**毎日報道される放射線量の数値**

福島県内では除染が鋭意進められていますが、栄養分に富んだ表土もはがされています。

（２）ペットも犠牲者

　ペットは仮設住宅で飼うことができないため、家に鎖で繋がれている。一日おきに餌をやりに来る主人を太陽は待っている。（ＮＨＫ　報道から）

（３）地方に感謝

除染した土を東京へ持って行ってやりたいという声がありました。新潟中越地震の際にも除雪しているある若者から「この大雪を東京へ持っていってやりたい」と話しかけられました。この思いはどこからでてくるのか、なぜそのようなことを言うのでしょうか。

よく考えれば今日の繁栄した東京を支えてきたのは東京に電力を送り、農水産物を届けてきた地方の力、お陰ではないかと思います。東京だけでなく、地方も繁栄するためにも東京から支援の輪を広げることが恩返しになります。東京人は東京だけを見るのでなく地方を考える必要があると思います。

「Ｔｈｉｎｋ　Ｇｌｏｂａｌｌｙ　Ａｃｔ　Ｌｏｃａｌｌｙ」です。

６．復興への課題

被災地の町が復興するためには改めて多くの課題があることを実感します。そのキーワードを整理すると人口減少社会、地域活力、インフラの老朽化、エネルギー確保、地球温暖化であろうと思います。

（１）人口減少社会

人口減少社会への進展とともに過疎化地域の増加が懸念されております。確かに、南相馬市では会う人のほぼ大半が高齢者です。被災地では若者が都市部へ流出し、残るのは高齢者だけという声を聴きます。このままでは数十年後には地域はいわゆる廃村、孤立地となり獣のすみかへと変わっていく、山紫水明の美しく豊かな国土は荒廃へと進むしかありません。

まさに、田中正造翁の「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、人を壊さざるべし」のごとく、これからの日本の国づくりが問われる時代になったと思います。

こうした状況から、私は克服のカギとして昔の定住圏構想を思い出します。拡大しすぎた地域を集約、再編し町をコンパクト化するとともに、山間部の産業の活性化を図る。そして若者の定住を図るしかないのではないか。このことにより地域社会の活性化と地産地消の省エネルギー社会を実現するしかないのではと考えます。そして大切なことは、この深刻な状況は東京都でも同じであるということです。いやむしろ、地縁社会の絆の薄い東京がより深刻かもしれません。

東京でも、多くの団地で人と建築物の高齢化が進んでいます。避難への情報を提供してもなかなか高齢者だけでは自助、共助は困難ですから、町のコンパクト化へ都市改造は不可欠であると思います。

（２）インフラの老朽化

さらに、インフラの老朽化とともに例えば、水道事業は給水人口の減少で料金収入が減少するため収支バランスを失い水道事業を維持していくことが困難になっていくのではないでしょうか。インフラの長寿命化を図ること、すなわち維持管理体制をしっかりまちづくりの中に位置づけることが重要であると思います。

頑丈な構造物でも１００年先は絶対安全とは言えず、人間と同じくしっかり診断し治療し長生きさせる必要があります。

７．おわりに

今回の震災では、いざというときの迅速な現場への駆付け、同業者や協力会社が共同で行った必要資材の確保などが、あまりにも有名な「くしの歯作戦」で立証されました。防災ボランティア協会会員の方の多くは、建設業界に在籍されていますので、災害時における東京都建設局と建設業界が良きパートナーとなるための「かすがい」の役割を果たすことが大切だと思います。

また、防災ボランティア組織の拡充を図る必要もありますが、さまざまな被災地で同じく被災直後の陣頭指揮、復興事業の展開などを担当した、国家公務員と各地の地方自治体職員の方々との情報交流が今後ますます必要ではないかと提案いたします。

最後に、一人で地方に暮らしてみるとつくづく家族のありがたみがわかります。特に、体調不良など不安なときには骨身に感じます。皆さんもくれぐれも家族へ感謝を忘れないようにしましょう。そして、元気で社会への恩返しにがんばりましょう。

編集部注：今回東京都総合防災訓練の記事を編集するにあたり、新川さんからは伊豆大島の報告を頂き、併せて南相馬市で復興に携わっておられる松倉さんに東日本大震災の現地報告をお願いしました。御両人には心より感謝申し上げます。

前期道路施設等点検～

前期「道路の施設とバリアフリー点検」が６月１０日から７月３１日の期間で実施され、協会員６０名が参加しました。

実施状況

事務所	実施日	参加協会員
一　建	7 /23・28	2名
二　建	6/30	4名
三　建	7/1～24	9名
四　建	7 /7～18	10名
五　建	7/22～28	6名
六　建	7/16・17・22	4名
西　建	7/3～11	6名
南東建	7/18	8名
南西建	6/30～7/23	6名
北南建	7/3・8・17	3名
北北建	7/9	2名
計		60名

今年度から道路管理部長名で「協会員の皆様の経験等を活かし職員へのアドバイス等お願いしたい」旨の協力依頼文をいただき、建設局との連携も更に深まりました。参加された皆様、暑い中ご苦労様でした。後期は１１月～１２月上旬に実施することで依頼を受けています。後期もよろしくお願いいたします

担当理事　久保田元久

点検に関与できたことに感謝

北多摩南部建設事務所の都道については、畑の中を通過する古くからの街道が都道となっている路線と、昭和 36 年の都市計画道路の決定を受けて整備された路線が混在しているため、幅員が５ｍ程度の都道から幅員３６ｍの都市計画道路まで様々な道路があります。

狭隘な都道と広幅員の都道では管理方法に違いがあるが、どちらにも共通することは、車

両の交通量が多いということです。特に狭隘な都道では、歩車混合となっているため、歩行者の安全に配慮した管理が求められています。

今回の点検では、広幅員の歩道のある道路の点検であるため、植樹舛の管理やバリアフリー点検、歩行者と自転車の安全、雨水排水の確保など、多岐に渡たる点検となりました。

点検の結果、植樹舛の縁石が歩行者や自転車の転倒の原因となる段差が 15 箇所ほど見つかり、また歩道と車道の間のガードパイプのボルトが消失した箇所などが見つかりました。

ボルトが消失したガードパイプ

この徒歩点検によって速やかに補修が必要な箇所(単価契約)と、事業として予算確保のうえで工事として大規模に実施するものなどを精査したうえで改善を行うこととなります。

道路の壊れについては、耐用年数の経過による老朽化によるもの、車両の接触などの物理的なもの、企業者の占用物件が維持管理上支障となっているものなど様々あるが、都道管理者として都民の安全、安心のために、都民の負託に的確に応えることが必要となっています。

この重要な作業に防災ボランティア会員として関与できたことは、ありがたいことと感謝しています。

北南建班　新川彰

JR 中央線武蔵小金井駅の横断歩道橋の資料などを寄贈

このたび JR 中央線武蔵小金井駅にあった横断歩道橋の橋歴板と写真などが、北多摩南部建設事務所に寄贈されました。提供されたのは本協会の会員で、元道路建設部鉄道立体課で鉄道の連立事業を担当されていた小森和雄さんです。当日は横断歩道橋が建設されるまでのご苦労や説明など様々なお話をされ、谷本所長に橋歴板と資料などを手渡しました。

橋歴板を手渡す小森さんと受け取る谷本所長

昭和 40 年代の交通戦争のなかで、東京都は道路の横断のために横断歩道橋を数多く設置していました。その中にあって、多摩地域の国鉄中央線の「開かずの踏切」であった、武蔵小金井駅の東側を通過する小金井街道踏切に、横断歩道橋としては初めてと思われる、鉄道を跨ぐ人道橋を建設しました。

小森さんは当時この歩道橋設置の担当者として、当時の国鉄と折衝を重ね、東京都と国鉄の板ばさみの中で粘り強い交渉の結果、困難な協定をまとめ上げました。

当該横断歩道橋は JR 中央線の連続立体交差事業の完成によってその使命を全うし、平成１９年に撤去されました。このとき歩道橋を管理する北多摩南部建設事務所に、架設の経緯をお話しして『橋歴板』の譲渡に御快諾いただき、

その後工事を担当していた武蔵小金井駅高架作業所の好意で小森さんの手元に届けられたものです。

寄贈された橋歴板

この資料は、JR 中央線の連続立体交差事業の進展を語るうえでも貴重なものです。今後北多摩南部建設事務所に保管されますが、沿線の小金井市などの要請があれば東京都から寄贈することも考えられます。

今回の寄贈品について興味のある方は、小森和雄さんにお話していただければ、見ることができると思いますので、連絡していただければ幸いです。

西部公園班　小森和雄
同行取材　北南建班　新川　彰

② 今年度の施設見学会は、環状二号線の橋梁現場をたどります。隅田川の新しい第一橋梁となる五建の「築地大橋工事」から、一建の「勝どき陸橋工事」及び「黎明大橋工事」までの地上部、橋上部を歩きながら見学します。帰りは今話題の「新虎通り」を経由してJR東京駅で解散です。奮ってご参加ください。

日時　11 月 19 日(水)　雨天決行
午後 1 時から4時半
一建に集合してバスで移動

③ 砂防講習会を開催します。今回は一般会員の参加も歓迎します。奮ってご参加ください。

日時　12月15日(月)
午後2時半から4時(受付2時)
場所　(公財)東京都道路整備保全公社
A・B 会議室
(小田急第一生命ビル17階)

④ 皆さまの活動の報告をお待ちしてます。ぜひ下記編集担当理事まで連絡いただくか、直接林(mikio.hayashi@okumuragumi.jp)まで原稿を送付いただければ幸いです。

⑤ 当協会のホームページアドレスは
http://tokyo-adv.info/ です。

※ 協会からのお知らせ ※

① 勝どきミニツアーの研修会を行います。活動参加者はぜひご参加ください。

日時　11月　11日(火)
研修会　午後 3 時半から
懇親会　午後5時半から
場所　道路整備保全公社 17 階会議室
懇親会は二庁 4 階

発行人　杉浦　浩
発　行　東京都建設防災ボランティア協会
新宿区西新宿 2-7-1
小田急第一生命ビル 20F
(公財)東京都道路整備保全公社内
編　集　高橋　紀男、林　幹生
堀内　康彦、丸岡　敏夫